

烏森トレッキング回想記

第十二回

日時：'04. 3. 13 (土) ~ 3. 14 (日)

概略行程：

- 1日目 日向和田駅ひなたわだ～吉野梅郷、「梅の公園」～吉川英治記念館～二俣尾駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊／登奈利荘
- 2日目 登奈利荘～（裏参道）～大楯峠～上坂部落～氷川溪谷～奥多摩駅
- メンバー；米本、山田、吉川、大谷、、磯崎

今回のトレッキングは、早春3月に、奥多摩／吉野梅郷、「梅公園」の訪問。

会頭は、「膝」の大事を取り、小林氏は社内旅行で、森氏は別の所用でと、それぞれ欠席。大谷氏も、義理と人情のしがらみ（なんでも、町内会の会長に選出され、そのお披露目会が翌朝ある由）から、初日のみの参加となる。

【余談33】最大人数8名の参加予定が、最終4名に半減は、何とも寂しい限りである。

決して、電話向こうの、女将の落胆振りが気になるわけではなく、無論、役割分担が増えるからでもない。**愉快な仲間との、折角の出会いが失なわれるからである（イエ～イ、拍手、拍手）！**

今回の反省は、日程決定／2月9日、宿予約／2月下旬、訪問／3月中旬と、若干、計画に間延びがあった点で、誠に難しいところである。

待ち合わせの青梅線／日向和田駅は、予想通りに人の波。

毎年、3／1～3／末日迄を「梅祭り」の期間とし、駅頭に紅白の雪洞を飾るばかりか、ホリデー快速も臨時停車する盛況振り。

気になる天気も、昨日から好転に向かい、早朝からの晴れ模様。ただ、春霞か、この時期にしては、透明感が今一つ。

定刻迄に全員の笑顔が揃い、颯爽と出発。

青梅街道を御岳方面に歩き、赤い欄干の「神代橋」で、「多摩川」を渡る。

橋上から、早春の多摩川を見下ろすと、朝陽を受けて水が光り、早、水温むが風も、両岸に自生する樹々は、なお、芽吹き気配すら見せず、枯野のごとし。

橋を渡ると、梅の街路樹が続く広い通りとなり、道の両側には、梅を材料とする土産物

店、飲食店が立ち並び、いつもの様に、お気に入りの右手側歩道をそぞろに歩き、いつも通り、時折り立ち止まっては、青空に梅花を透かし見る。

青梅街道と平行する、もう一本の広い通り、吉野街道を渡り、「梅公園」への小道を入ると、道の両側、民家の庭には、梅に限らぬ春の花々が咲き乱れ、・色ばかりか、育む人の心に、気持ちが和む。

公園近くの露店には、「綿菓子」、「もろこし」、「たこ焼き」と馴染みの品が並べられ、祭り気分を高揚させる。

園内は、早、人盛況、人の波。

順路に従い、梅林の丘陵を登り、白梅、紅梅、綻び盛りの梅花を愛で、梅に交じる「サンシュユ」の黄色花で眼を洗う。

ピークに設けられた休憩所から梅公園を俯瞰し、白い花を付ける「枝垂れ梅」を背景に、はい、ポーズ！

園を一巡し、入り口近くの木テーブルに座り、若干、早めの昼食。

梅見と云うこともあり、今回は、特別に、「梅酒」を準備し、更に、メンバーからのリクエストで、「缶ビール」も加え、「昼間酒」の大判振る舞い。

その代わりにとばかり、久し振りの弁当持参に、姑息を恐れず、メンバーの嗜好と家庭の事情を窺うと、家庭味は、「握り飯」の一名のみで、後は、コンビニ、駅弁の相違はあれ、大同小異の簡便物…あじゃ！

公園管理の親父から、「園内、火気厳禁！」と、みそ汁用の湯沸かしを注意されるが、悪運強く沸騰後！

【余談34】出遅れにより詳細不明も、当初、横長ベンチで食事を始めたが、間無く近くの木テーブルが空き、早速、移動を開始。

ところが、いつの間にか、四面の二角に女性6人組が座り込み、一瞬驚く。

詰めて座れば、我ら5名を含め、11名の着席は可能で、決して拒むものではないが…
気弱い我らは、何故か、片隅、小声での小宴を強いられる。

後で事情を聞くと、多人数であることを理由に、相席を申し入れられたとの由で（別の説では、少々の後塵を物ともせず、着席権を主張したとも）、年齢50歳内外と思われるリーダー以外は比較的小さい女性達、我らを異性と意識せずはやむなしとしても、“折角の楽しい食事を何とも無体な方々”と繰り返すを云う。

道に戻り、「吉川英治記念館」へと、裏道を北に歩く。

柔らかな陽射しが心地良く、道中、至る所で咲く梅は、それぞれに見事な花模様。まさ

に、案内通りの、“梅こぼれ 春が爛漫 吉野郷”と悦に入る。

道中の案内看板に誘われ、農家裏口まで入り込んで、「岩割りの梅」を拝観するが、命名ほどの迫力はなし。

しかし、柵に囲まれた黒土の畑地に、樹高低く、等間隔に植育された梅林は、山田、大谷両氏の解説を得、食用樹（梅実）と知るが、見事な枝振りばかりか、白い梅花が黒土と黒ずみの幹枝に映え、得も言われぬ清楚な美しさを醸し出す。

道なりに、「即清寺」の境内に昇る。

弘法大師は、ここにも立ち、見上げる背には、薨の波と青い空。眩しさに手を翳し、“南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛”と合掌。

「吉川英治記念館」は直ぐの距離。

受付の、長蛇の列を見た大谷氏、“以前、両親と来館したこともあり、外で待とうか…”との躊躇を見せるが、**人波に押されて全員入場。**

順路の最初は、硝子戸越しに透かし見る書斎から。

余りにも野暮な仕打ちと舌打ちし、櫓炬燵、木製戸棚を確認する程度で、順路を進む。

記念物展示室には人溢れ、押されるままに前へ進む。

ゆっくりと拝観できる状況にはないが、机上に並べられた手書き原稿を拾い読みし、**よくぞ、読み取れるものだ！と、毎度ながらに、校正者の天賦振りに感心する。**

続く順路は庭園歩き。

素人判断を恐れず、庭規模に比し、若干、多樹気味ではと決めつけるが、庭の中央に立つ巨樹、「椎の木」は、案内通りの存在感、筆を休め、窓際に立って、臉をほぐす吉川英治の姿を思い起こさず。

見学を一巡し、後陣を待ち、庭先の陶製ベンチに休む。

その間、傍らに据えられた古井戸から、水を汲み上げ、洗顔したり、旧屋の、かつての玄関位置を推理し合ったりと、烏合の衆。

館の正面側、「吉野街道」に出て、「二俣尾駅」へと北に歩く。

駅への脇道に入ると、高台の小学校校庭に見事な桜並木を発見。未だ、蕾の膨らむ気配見られずも、幹は、早、春に輝き、奥多摩の桜開花は、後1ヶ月ばかりかと推量する。

米本氏が、道端、無人店舗に並べられた「木片」を買い求め、“使途に、特に定めは無し”

と興じ、メンバーの心を和ませます。

無人駅、「二俣尾駅」で、なお同行せんとする大谷氏を上り電車に押し込み、上り下りに別れる。

御岳平から富士峰園地裏道を歩き、大塚山分岐に設置された木テーブルで、春の午後の一服。眼前に、芽吹き前の「御獄神社」、「奥の院」の峰を見据え、生レモンを絞って、「レモン・ティー」を喫茶。

ちょうどの機会と、未定の翌日行程を衆議し、裏参道から、「大楯峠」に下り、上坂部落を奥多摩に抜け、氷川キャンプ場で飯盒炊さんと決め、食事メニューは山田氏一任で、無事結論。

とは言うものの、メンバーは皆、「長州そうせい候」、相槌打つばかりで意見は述べず。

頬を撫でる微風が、時間の流れと共に寒気を増す頃、着重ねに、ザックからコートを取り出し、それを機にとばかりに宿へと立ち上がる。

「登奈利荘」の女将が、笑みを浮かべて大歓迎。いつもの二階部屋に荷を降ろす。

宴の前に、NHK／宮本愛子アナが案内する、「小さな旅、“神の山 春の舞い ～東京御岳山～”」の集録ビデオを観る。登場する「原島荘」は、近隣、参道沿いの既知の宿。

“原島さんとは、同じ、「婿取り同志」ということで、日頃から親しくさせてもらっています”と、云わずもながの女将の告白。何を羞じらってか、早、冷酒のサービスが加わり、今日も楽しい夕餉の進行、御油断召されるな鳥の反撃を！

賄いを手伝う子息は、訪れる度に、びっくりするほどの成長振りを見せるが、その分、女将の襟元に白いものが目立つは止む無しか。

部屋に戻り、静かな二次会。

酒はウイスキーで、当ては、ガス・バーナーで弾く「ポップ・コーン」と、山田氏持参の「あられピーナツ」と「あたりめの醤油焼き」。いずれも**美味も、我がメンバーには、いずれも御法度の「高カロリー一品」。**

ベランダに立ち、明日の天気を占う。

天空の星はかすかな輝きで、町の灯は山麓御岳駅周辺迄、都心の灯は闇間に消失し、明日の快晴望む薄と観念する。

朝食は、いつも通りに8時から。

食卓には、例の「大根煮」も添えられ、メンバーの食欲旺盛、お櫃の蓋は閉じる間も無し。

第一回目に予定した裏参道下山を、7年目で、やっと実現。

谷を巻きながら下る道は、なだらかな平坦路で、若干、小石が多いのが難点であるが、視界は明るく、芽吹きの際は萌葱色に包まれる人気のコース。

道の要所、「コナラの巨樹」が根を張る「大楯峠」で小休止。

右手／北東への山道を下ると、「鳩ノ巣」へ、前方／北への尾根道直進で、「奥多摩」へ、左手／林道終点から西南へ下ると、名瀑、「海沢三滝」を経、「奥多摩」へ。(直進道と合流)

【余談35】鳩ノ巣から、裏参道を登る途中、「越沢パッドレス・キャンプ場」を見下ろす道脇に、四阿屋風の休憩小屋があり、軒下にハイカーの名句(主に川柳)が並べられている。選考者不明も、通る度に休み、楽しい一時を過ごしている。

山歩き	すすめて妻は 海外へ	徹也
山歩き	亭主(われ)に差をつけ 妻威張り	喜楽
山歩き	昨日(きのう)の酒が 足乱す	トホホ…
擦れ違い	あちらとこちら 年令(とし)くらべ	KMCみ
御岳みち	足にわらわれ 年さとり	文子

負けずに一句。

御岳山	ここにも鎮座 山の神	烏森
家族にも	ケーブル登山は ひた隠し	烏森
ディパック	衣服詰め込み 型造り	烏森
山行きの	都合決めるは 妻の腹	烏森
トレッキング	いつのまにやら 里歩き	烏森
小休止	我が水からと 皆が云う	烏森

* '06. 春 更に下に、新たな四阿屋が完成し、短冊が並ぶ。

間無く、鳩ノ巣方面から登ってきた中年女性1名が到着。

木ベンチ2台は我らが占有中にて見、少し離れた巨樹の根元に荷を降ろすや、“独りで、それも女性が”と、首を捻る吉川氏。

【余談36】トレッキング入門書では、中高年者の「単独行」を控える様指導する。

理由は明快で、複数メンバーであれば、事故発生時、仲間による助けや通報が期待でき

るが、単独行だとそうはいかないからである。

確かに、駅前や山頂等で見かける、「行方不明者の情報提供依頼」のほとんどが高齢者の単独行で、問題の本質からすると、中高年者に限定されるわけではないが、トラブル発生確率や自力脱出能力から指導されるものと思われる。

ただ、単独行可否の議論で、「山歩き」そのものの目的を忘れてはならない。

詳細な議論は別の機会に譲るが、「山歩き」に求める価値感やその手法は、個々人、自ずと異なり、トレッキングに集団行動は馴染み辛いと云う考えが従来から根強く見られ、今なお、「山歩き」の原点は、「単独行」であると主張する人が少なくない。(頂きを目指す「山岳登山」との大きな相違点であるが、この世界でも、「無酸素登山」とか「単独登頂」とか、別次元の価値観はあるようである)

「氷川・奥多摩駅方面」への道を直進。

なだらかな尾根歩きの後には、ジグザグ模様の急坂が始まり、本格的な下りに突入。踏み跡は薄く、道は荒れ放題。途中、倒木が目立つ頃には、次第に列間が広がり、元気な会話も一休み。

中高年者には、下ると云うより、墜ちていく人が多いと揶揄する人がいるが、云い得て妙である。

樹間に舗装路が見え隠れし始めると、間無く、「上坂部落」に到着。

「奥多摩霊園」を覗いた後、単調な舗装路を下り、“何とも嫌な道”と、脚が悲鳴を上げる頃、大楯峠からの林道に合流。

奥多摩駅迄は、まだまだ遠く、途中、金網越しに、都の水産試験場生け簀を眺め、しばしの休息。

予定時間を約1時間遅れて到着し、またまた予定の変更！

疲労気味のメンバーには、最早、飯盒炊さんする意欲無しと推測し、駅前スーパーで各自好みの弁当を買い、氷川溪谷に降りて、“のんびり昼食”の緊急動議を提案すると、即承認を得る。

山田氏熟慮のメニューは明らかにされず、次回の楽しみに残す。

吊り橋横の石段を下り、渓流出合いの河原に荷を降ろし、竈が無いせいもあり、珍しく、三々五々に分かれての静かな昼食。

各自の調達物を覗き見るや、いずれも簡便物で総じて小食は、疲労のせいか。

それでも、「おにぎり」+「焼きそばパン」+「カップ麺」の3食揃い踏みの大食漢が約1名。

食後は、のんびりと。

模様を選んで河原小石を集める人、形を選んで川面に石を滑らし遊ぶ人、シートを敷いて寝そべる人、早春の午後も、それぞれに過ごす。

溪谷の流れは、雪解け水も加わり、透明度が一層、水量、勢いともに文句無し。

陽が雲間に見え隠れし、早春の風に揺れる樹々がザワザワと葉音を立てる頃には、汗はすっかり引き、いつの間にか寒気が忍びよる。

ザックから防寒具を引っ張り出し、初日の、朝の装いに戻すと共に、帰り支度に、残る荷物をパッキング。

奥多摩駅は至近距離にて、背負う迄もなし。